

# 4

## TBSテレビ



### 星野 誠 (ほしの まこと)

震災当時：TBSテレビ取締役報道局長（調査当時：同常務取締役）

1980年東京放送入社。社会部記者から社会部デスクを経て、2000年にニューヨーク支局長、10年に報道局長、11年にTBSテレビ取締役報道局長となり東日本大震災を迎える。13年ネットワーク局・営業局・関西支社担当（報道局・情報制作局担当）取締役を経て、14年7月31日インタビュー時はTBSテレビ常務取締役（営業総括）。

15年4月TBSテレビ常務を退任しBS-TBS社長、同年6月に東京放送ホールディングス執行役員に就任。

陪席 福島隆史 解説委員（調査当時）

インタビュー後日補足：2017年3月2日、桶田敦テレビュー福島報道制作局専門局長（TBS解説委員）、同12月11日、福島隆史解説委員



### □ インタビュー実施

2014年7月31日（木曜日）午前10時～12時

東京都港区赤坂、TBS本社会議室にて

聞き手：田中淳、五十嵐浩司、藤澤秀敏

## □ インタビューの要点

■系列も含めて被災地へは250人が入って取材した。2011年5月からはJNN三陸臨時支局を宮城県気仙沼市に設置し、最大20人規模を増員し、また原発取材には福島原発取材本部を作ってTBSから人を派遣した。また、ユーーストリームに当日の5時42分から、ニュースバード（24時間のCSのニュースチャンネル）をそのまま配信したり、安否放送としてユーチューブに被災者のビデオメッセージを流すなどSNS連携を直後から進めた。

■系列28社の部長会レベル・局長会レベル・デスクレベルで総括をした。そこから足りない点についてマニュアル改訂や訓練を実施した。ガソリンスタンドの設置や津波警報時のアナウンス読み上げ文改訂などが一例。また、外信部や番組担当を含めた横断的な組織として「災害報道プロジェクト」を立ち上げ、震災に関する情報共有を図っている。

■震災前から実施していたTBS本社機能停止時に代替機能を強化し、MBS毎日放送、CBC中部日本放送、RKB毎日放送から全国の放送が可能な機能を最低限は確保できるような技術的な設備の拡充をした。

## □ インタビュー後記

将来に備えて米国の研究所に原発の知識習得と人脈づくりのために記者を留学させたり、情報カメラをIP化したり、毎月1回（現時点では2回）訓練を実施したり、系列間の情報共有の場を設けるなど対策が具体的な話がうかがえたが、それ以上にインタビューの中で、「やっぱり準備が足りなかったなという、正直、率直な気持ちで言うと」あるいは「視聴者に対する情報提供の役割としては不十分だったなあというふうには思います」など率直な表現がある意味新鮮だった。その一方で、視聴者を不安にさせない報道をという「気持ちもありましたけど、それは漠然と不安にさせないということでありまして、非常に根拠なき感情的な抑制だったのかな」と思う、あるいは取材の安全確保に関して原発取材に「とにかく行きたがってました」という言葉の背景にある具体的な葛藤について、機会があれば聞いてみたいと思う。

また、ソーシャルメディアなどあらゆる手段が使える現在では、災害時に「コンテンツを作る能力があって、通常の間使っている電波に乗せることが無理だったらほかの」媒体を使えばよいという考え方は、災害報道を超えて、テレビ報道のあり方を考えさせるものだった。

（田中 淳）

**星野** あの揺れは冷水（NHK報道局長）さんと一緒に体験したんです。気象庁のビルが揺れるのを見てたんですね。たまたま車に乗っていったもので、そんなに事態がすごくなると思わないので、冷水さんに「一緒に乗せていきますよ」と言ったら、冷水さんが「いやいや、もう、ご迷惑になるから」と言って当初は遠慮されていたが、あとで聞いたらすぐに乗ったので冷水さんは渋谷に帰れたというふうに言ってました。冷水さんはそのあと、必ずそのことで「あのときよく声をかけてくれてありがとうね」というのは、一番はじめに思い出します。

—— 震災発生時に気象庁にいたのか。

**星野** 気象庁の隣のビルですね。気象業務支援センター。気象庁の関係団体。

—— TBSでは社として、東日本大震災3・11の報道もしくは動き方、機構などについて全社的な総括はおこなったか。

**星野** 私たちはTBS報道局中心に系列のネットワークを形成していきまして、28社でやっています。やったかといったら、もうなんぼやったか分からないほどやりましたね。各社の部長会のレベル、局長会のレベルおよびデスクのレベルで総括はもう延々やりました。良かったか悪かったかという簡単なものじゃなくて、そうですね、いいこと悪いこと、いろんなやり方でやりました。まずそれを超えて、今回の震災でメディアというかテレビメディアがえらい足りないところが多いなというのをものすごく実感いたしました。

まず一番足りなかったというのは、防災メディアであるというふうに言いながら2万人の死者を出してしまったということですね。一番の内心忸怩たるところはですね。確かに原発の事故も少しあとにありましたけれど、震災が起きたあとにアナウンサーが、被害を伝えると同時に、逃げてくれ逃げてくれと言い続けていたら、きっと2万人も死ななかったんじゃないかなというふうに、個人的には思っています。訓練をやったり、いろんなマニュアル改訂をしています。これNHKさんもそうだけど、例えばあれだけの大規模な地震発生直後にはとにかく「津波が来ます。逃げてください」と絶叫型に変えた。つまりこれはもう、前回からの反省点、反省以外の何ものでもないなと思っています。起こってしまって、足りなかったものがすごくたくさんわかった。同時にいろんな立場や規模が与えられた条件の中では、当時はまあ頑張っていたなというところもあるというところですね。震災直後には頑張っていたところが、いまも同じように続けられているかということ、いま私は、直接の現場にはおりませんけれども、外から見るとちょっとそこは疑問もある気がします。

—— そうした反省からマニュアル等を変えたとのことだが、一番大きな教訓となった点は何か。

**星野** やっぱ準備が足らなかったなという、正直、素直な気持ちで言えば、そういうことですね。その後の対策にそれがすごく表れていると思うんですね。

—— マニュアルの改訂をしたか。

**星野** それはもうどんどんどんやりました。例えば、避難の呼びかけ文を変えた。やっぱ当時の呼びかけが弱かったために死者が広がったというのは、直接的な因果関係はわからないけど、これは絶対あると思っています。それから、先月、TBSの敷地内にガソリンスタンドが完成しました。こ

れは10日間分、うちの取材車両がガソリンを入れられる。

これも逆照射なんですね。つまり震災で何が物理的に足りなかったと言ったら、ガソリンだった。本当に取材はできない。特に地方局は、ガソリンというか燃料ですね。東北放送ではラジオは停波するすれすれまで、寸前まで行って、系列でドラム缶を確保して陸路で送ったというのがあったんですね。意外と水は手に入って、やっぱりずっともう1~2か月はガソリン不足がもう最大の問題でした。その反省でやっとできたんですよ。食料備蓄も、いまは何日ぐらい食べられるだけあるんだっけ。

**福島** 報道に関して言うと、たぶん一週間はゆうにもつ。

**星野** 一週間分ぐらいは備蓄も毎年ずっと、常時やっているんですよ。

—— 何台の車を動かすことを想定しているのか。また、自家発電用のガソリンも含むのか。

**星野** 自家発は別です。自家発の分は別に一週間分ぐらい。

—— 取材車両に限定して10日間分のガソリンか。

**星野** そうです、そうです。

**福島** それと、局地的に系列局が完全に窮地に陥ったときに、暫定的にもつような油を持っていくというイメージです。

**星野** 少しずつ使って、タンクローリーが来て補給できるまでの10日分ぐらい動き回れるだけは確保してある。これ、ものすごい進歩ですね。震災前はこれも無かった。あと、原発についての知識というのはもう、あまりにも無かったということですよ。だから当時、福島中央テレビが（福島第一原発1号機の水素爆発の）画を撮る前にも、政府はいろんな発表をしていたんです。例えば、冷却トラブルがあったということはもう、当日の午後4時36分ころに発表されていて、それも福島の地方局も知っている。原子力災害対策特別措置法に準じたこと、それになったことは全部発表されていた。

ただ地元は、地元でそれが何を意味して次に何が起こるかというのは分からなかった、というのがありました。それから、震災も原発もそうですけど、やっぱり民放はNHKに比べてカメラの台数が少なかった。特にそれがIP回線で——いま整備していますけど、キー局と繋がれていなかった。

—— 情報カメラか。

**星野** そうですね。カメラはいいんですよ、問題はそこからの送信ですね。それをどこまで東京まで持ってくるかということで、いわゆるFPUという空中波でアンテナで電波を送ることも、やっぱり電源ダウンでダメなんです。我々は原発の福島一と二の間に情報カメラ持っていたのですが、これが電源がダウンして画が来なくなった。それで、福島中央テレビの画だけが、あのドカンという画が映ったということで、これもそのときに戻ることはできませんけども、やっぱり全国の系列局のカメラを整備して、IPで、つまり有線でインターネット回線で、東京に集まるようになり整備しました。逆に言ったら、前は無かったという話なんですよ。

それから、あの福島中央テレビの映像には及びませんが、すぐにカメラを設置しました。うちのニュースサイトにアクセスされたことがあるかどうか分かりませんが、いまでもずっと24時間、福島第一原発は見えるんです。これを、今日皆さんにお会いするので、たまたま見ていたら、イ

インターネット上で大きな、いわゆる炎上が起こっていました。つまり第4号機で大きなホースで洗浄しているんですよ。吹き飛ばしているんですよ、上をね。昨日、たまたまそのサイトから入っていたら、やっぱり見てる人がいるんだと思いました。昨日のニュースです。見ていると、結構な勢いでどんどん水をかけているんです。この監視カメラ [ JNN福島第一原発情報カメラ (LIVE) [http://news.tbs.co.jp/newsi\\_sp/Fukushima\\_Daiichi\\_NPP/](http://news.tbs.co.jp/newsi_sp/Fukushima_Daiichi_NPP/) ] の映像を見ている人がいて、一番多いときは1ヶ月に120万とか、百何十万とかっていうアクセスもありました。これも、やっぱり足りなかったということについての反省からですね、全部。

—— こうした教訓を社内で共有するための手立てはどのようなものか。

**星野** これは、さっき言った系列の部長会、局長会等々でやってますが——ここにいる福島君なんかは、それを全部蓄積している人の何人かですけども、人数的には正直言って、一時ほどの共有度は無くなってきていると正直には思っています。

—— 特別な学習会や次長、デスククラスの横の繋がりなど新しい組織は立ち上げたか。

**福島** はい、星野がまだ現場にいたときに立ち上げたのが「災害報道プロジェクト」といって、これは直接取材で国内の災害を対象としない、例えば外信部とか、それから番組担当なんかも含めて、必ず幹部クラスと若手と何人かずつ出してもらって横断的な組織としてこの震災に関する情報共有を図るプロジェクトです(注1)。

—— 幹部クラスとは。

**福島** デスク以上、ですね。番組だと編集長クラスですね。

**星野** 今日はちょっと天気が悪いんですけど、これ [ JNN 福島第一原発情報カメラ ] もいまだにずっとやってて、福島中央テレビ [ が撮影したような ] 画は撮れなかったけど、ということですね。

—— これはホームページから入れるんですか。

**星野** 入れません。「News-i」 [ <http://news.tbs.co.jp/3snews/> ] というHPから入れます。

**福島** ユーストリーム配信です。

**星野** 東電もいま自分でやっていますけど、うちは5月の、線量がある中、皆でカメラを担ぎ上げて始めました。はじめはいろんな言葉で、世界中の書き込みがあって、何語が分からないような言葉もずいぶんありましたね。世界で皆、あの原発どうなっているのかというのは、もう興味があったんですね。

—— 「災害報道プロジェクト」はどのぐらいの頻度で活動をしているのか。いまも継続しているのか、それとも少し先細りになっているのか。

**福島** 先細りに、正直なってますね。定期的な会合というのも、最近いつやったかなという感じにはなっています(注2))。ただ、横の情報連絡、これは紙で配布したり、メールでのやりとりをしたりというのはもう常時やっています。いまに繋がる形とすれば、例えば新しい動きとして、去年の特別警報の導入があったり、伊豆大島の土砂災害があったり、そういう場面場面で自分達がしてきた報道を振り返って、どこがよかったか、どこがよくなかったかというのを常時フィードバックするような形でのやり取りというのは常時やっています。

**星野** 自分としては何をやったかという、一番はじめのアナウンサーとかカメラとかいうのは若干ものすごく引いちゃった話 [慎重にならずに、もっと津波を予想して先取りした放送ができなかったこと] なんですね。引いちゃった話でもう一つ足りなかったものを補うのは、ヘリの民放での共有という映像共有システムを作ったんですね。いま民間放送各社は、つくばに各社順番で必ずヘリを一台待機させているんです。これはやっぱりヘリポートが東京湾岸沿いにありますので、津波でみんなヘリが流れたりしたら困る。パイロットがつくばに行く費用などは皆で折半して、災害用の民放の共用ヘリにしようということです。仙台空港の自分達の系列局のヘリが目の前で流されるのを見ましたから。これもそれに対する反省からやった対策ということですね。

—— これはいつからか。

**星野** これは僕が担当しましたが……もう1年何か月経ちますね。

—— 各社所有のヘリのうち、1台はつくばに置く。

**星野** 必ずそこにいます。2か月交代で。だからクルーもそこに置いているので、出張扱いになったりと面倒くさいことなんですけども。全社、ヘリがあるところがすごく近いんですよ。東京ヘリポートとか、みんなダメなときは一緒にダメになってしまう。だから共通の非常事態という認識になったら、そのヘリの映像だけはとにかく共有しよう。これは、まあまあ、東京のキー・ステーションの試みとしてはすごく画期的だというふうに思いますね。

—— つくばにヘリポートがある？

**星野** そうです。つまり、津波が来ないところという、ただそれだけですけども。これはやはり、津波の報道が弱かったという最初に戻ってしまいます。NHKさんも仙台空港に1台ヘリを持っていたけれど、ああいうのをがんがんやっていたら被害は少なかったんじゃないかなというのは、すごく思いますね。これがさっき言った、言ってみればすごく引いちゃったところなんですね。

何をあのときに現場の指揮官としてやったかという、いくつかのことをやりました。まず、さっき言った系列の取材母体を気仙沼に作ろうというので、これはJNN三陸臨時支局というのを、ホテルの何部屋かを借り上げて設けました。これは、規模は小さくなりましたけども、いまだにやってます。これも2011年5月からの稼働です。この規模はものすごく大きくて、20人ぐらいの規模で1年ちょっと。それからもうちょっと規模を減らして次の1年。今年はまたちょっと規模を減らしましたが、いまだに支局は活動をしています。

—— 系列局からとTBSから、それぞれどのぐらいの人員を出されたか。

**星野** 簡単に言うとTBSが半分、それから残りの大手の系列局を中心に地方局が全部寄り添いあう。この規模はなかなか、本当に大きくて、カメラ台数で行くと4クルーとか5クルーぐらいは活動するというとっても大きな規模のものでしたね。たまたま気仙沼の岩盤の上にある大きなホテルで、まったく津波の心配も無くて地震にも強いところを借りられたので、これをまずやりました。それから福島県には、原発の知識が地元局に無かったもので、ここには福島原発取材本部という名の組織を作ってTBSから人を派遣していました。これも福島君も行ったんですが、何人か若干明るいのがいて、その人達が取材のノウハウだったり——ノウハウというか主に線量管理ですよ——とか、地

元のテレビ局の人のメンテナンスをやりましたね。三陸臨時支局や福島取材本部に入った記者なんか、ドキュメンタリータッチの——いろんなテーマがあるんですけど、番組タイトルに「私の」と付く記者の一人称で伝えるドキュメンタリーのような内容の番組をやりました。これ、深夜で全部放送しまして、いろんな賞もいただきましたけども、これはこれで起こった後の対策ですけども、一生懸命、とにかく現場に寄りそうというか、集中的な報道じゃなくて息の長い、地味でもいいから息を長くやろうよと。「今回ちょっと特別なんで」ということで、そういうことを現場の長のときはそういう方針のもとでやりましたね。

—— TBSの報道局全体で、原発について知識がある専門記者といえる人材はどれぐらいいたか。

**星野** そうですね、うーん、まあ、詳しいというのは3人ぐらいですね。

—— 母数は3~400人ぐらいか

**星野** 3~400はいかないけど、外部もいれたら300分の3人ぐらいですね。

—— 報道局として300人ぐらい。

**星野** 社員の記者やディレクターで、そのうち、ちょっと込み入った話ができたり、あの頃いろいろ出てました原発の先生と五分五分で話をするのができるのは3人ぐらいでした。

—— その後に増員などはあったか。

**星野** それで1人、——これはやっぱり将来に投資しなきゃいけないと思って、2012年の9月から13年の6月まで、カーネギー国際平和財団に客員研究員として出しました。具体的な成果が上がるのかわからないけれども、またいろいろ反対はありましたけど意欲的だったので出しました。これもやはり世界のいわゆる核サイクルに関する重要なキーマンがいて、その人達とはもう対等につき合えるようになって帰ってきました。

—— 留学したのは何歳ぐらいのどの職種の社員か。

**星野** 記者です。

**福島** 派遣時に入社17年目。

**星野** すごく頑張ってる記者で、行きたいというので。

—— この記者は、震災当時の3人の詳しい記者には入っていなかったわけですね。

**星野** 入ってないです。3人には入っていない。

あまりにも事態が大きかったんで、いくつかはやっぱりそういうふうにやりましたね。

—— 新人採用の際に特に原子力分野の人材を採ることは？

**星野** それは無いです。

—— 定期的な勉強会などは？

**福島** 原子力に特化した勉強会というのは、特に頻繁にやったりということはありません。ただ、災害広く全般、震災に限らず、先ほども申し上げましたけれども、最近起きる自然災害が極端化しているというような現状がありますので、その特徴と、それに対応してどういう伝え方をするかについては、いろんな提案をして合意するというような場はその都度開いています。

—— 現在は、TBSは海外の原子力に関する権威とパイプを持っているのか。

**星野** 留学した局員がいるので、今ではできています。

—— それ以前にTBSが持っていた原子力の専門家の方とは少し違う立場か。

**星野** 彼女は全然レベルが違うと思います。

—— 違う人材を登用しようというのが、経営層や幹部たちの狙いか。

**星野** というかやっぱり全体をオーバービューできる知識だったり、オーバービューできる人達へのアクセスができる人は持っていないきやいけないなど。そのくらい大きな事故でしたので。基本的にあとから振り返ると、あの原発事故はアメリカ軍というか、アメリカ側の情報がかなり正しいということが分かったので、それなら、始めからその全体図をつかむのは、直接そこにコンタクトをしたほうがいいんじゃないかと思っています。

—— そうすると、前とは違う原子力に関するアドバイザーを選ぶことになるのか。

**星野** そう。それが実際、社としてコンタクトがあるのは知ってますけど、そういうことが必要な事態になっていないので、ものすごく機能しているかどうかはちょっと分かりません。正直分かりません。

—— 私が教えている若い学生たちの間には、いわゆる原発報道に関してマスメディア批判がすごくある。例えば、「大本営発表」報道じゃないか、当局の発表をそのまま流しただけじゃないか、と。こういう批判に対しては？

**星野** うーん、正直、やっぱり準備不足というか。その準備の中には、知識だったり、ケースの検証も入るんですけど、非常に、視聴者に対する情報提供の役割としては不十分だったなあというふうには思います。当時報道をやってまして、「本当はいろんなことを分かっているだろう」とか、「裏はどうなってるの」と外部の人から聞かれましたけど、正直、政府の発表以外のことは分からなかったですね。だから、政府の発表の評価ということについて、情報のマージンがどこにどの幅の広さぐらい想定すればいいのかまでは分かりましたけど、普通ならかなりの事象で自分達で幅の広さを設定して、「政府はこう言ってるいけど本当はこっちらしいんだよね」という判断がありますけれど。枝野官房長官の発表があって、幅は分かりましたけど、「本当はどのへんなの」という勘がまったく無かったです。私個人的にも無かったし、会社としてもやっぱり無かったんじゃないかなというふうに思っております。ただ、あとから見聞きすると、政府の発表も、我々の認識よりももっともっと重篤というか、とつても危機的な状況が、あの時期には発生してたんだなというのを思います。

—— 原発、それから放射能事故に関して視聴者を不安にさせない報道を心がけましたか。

**星野** もちろんそういう気持ちもありましたけど、それは漠然と不安にさせないということでありまして、非常に根拠なき感情的な抑制だったのかなというふうに思います。つまり、さっき申しましたように、その位置付けなりファクトがきちんと掴めていれば、そこを立脚点にした判断というのがあるんですけど、それも無く、さっき言ったようにレンジが、幅が絞れないままに、「ちょっとこれは過激だからやめちゃおう」みたいなところもあった。そういう意味ではちょっと幼稚というか、練度が低かったのかなというふうに思います。

あと、個人的に思うのは、日本テレビ系列の福島中央テレビのあの映像ですね。あの映像の使用頻



度については、私たちは常々疑問に思っまして。何を申し上げたいかという、日本テレビは、人様のことだけど、抑制的過ぎるというふうにずっと感じています。私がああの映像を入手していたらもっともっと映像から読み取れるという、映像ファクトがあるわけですから、うちがああの映像があったらたぶん10倍は使っていたと思います。あの映像の放映がね、私がああの映像を持っている編集責任者だったら、もっとあの映像から何が分かるかというのをやったと思います。日本テレビさんは、材料を見た上で高度な編集判断をされたのかもしれませんが、あの映像については、不安を煽るっていう領域まで入っているものだと思いますけど、まあ日テレさんは慎重な判断をされたのかなど。他社のことだけどそういうふうに感じてました。

—— 系列局とTBSの関係、あるいはネットニュースと被災地向けのプログラムの関係に変化はあったか。また、今後に予想される南海トラフ地震では系列局との関係でどこがリーダーシップをとるのかなどの判断についてはどうか。

**星野** お答えになっているかどうか分かりませんが、今回のいわゆる震災と原発は、簡単に言ってしまうとニュース・バリューが大きいものでしたから、それをTBSというキー・ステーションを通じて、全国の皆さんに届ける、すべてがそういう対象であると、3・11はそういうふうにしてやりました。それがさっき言ったみたいな、取材拠点を作って、東京が編集権も持って地元に行く。これは出されると地元にとって困るものもありましたけど、そういうのを乗り越えて地元に説得しながら——つまり地元にとっては不利になるわけなんです——そういうことも説得しながら、なんでも全国に伝えるということでした。

—— 地元にとって不利になるというのは、具体的には。

**星野** つまり風評被害の問題もそうです。観光振興のために被災地に来てもらうのがいいんだということですよ。それから、1ヶ月くらい経ちましたら、三陸のほうの局の幹部からは、こっちは2万人の犠牲者という実際リアルに被害があるのに、なんで東京の人はいつも福島のほうを先にやるのかと言われた。当時は、津波の被災地のほうは、いろいろ現状の対策をやっているところでしたが、政府の対策を、自衛隊なら自衛隊の駐屯部隊の滞在を長くするとか、どんどんやってほしい。そのためにはニュースに取り上げてほしい、というのがありました。メディアとすると2万人亡くなくても、ある一定の日からは福島原発のニュース・バリューが上がってしまう。こういうことについてはよく話題にはなりましたね。議論の対象にはなりました。2万人亡くなったことは亡くなったことで厳粛に受け止めて、その一方で福島原発の事故の大きさはもう超ビッグニュースでありまして、何万人亡くなるということとは別に、やはり見て行かなきゃいけないものだというふうにしてましたので、あるところから福島のほうのニュースがすごく多くなりました。

—— SNSとの連携は。

**福島** うちが一番早かったです。

**星野** ああ、パーソンファインダー（グーグルが災害発生時に提供した安否確認サービス）とか。

**福島** まずはユーストリームが一番早かったですね。当日の5時42分に、ニュースバードという24時間のCSのニュースチャンネルがあるんですが、これをそのまま配信する形で。このときには地上

波の特番をそのままサイマル放送をやっていましたので、地上波の特番をそのままユーストリームでも見られた。時間が経ってからニコニコ生放送もそうですし、あとはグーグルとの関係で言うとユーチューブにビデオメッセージというか、避難所から「肉親や知人の安否がわからない」、あるいは「自分はいまここにいる」と知り合いに知らせたい、というビデオメッセージをワンショットです、カメラに向かって語りかけてもらって、それをほぼ全員、ユーチューブで流してもらいました。

—— このデジタル方面への働きかけはTBSがもともと持ちかけたか？

**星野** やってました。

**福島** どっちが先だったか分からないですけど、ユーストリームとはかなり早く、こっちが動いた。

—— TBSと福島の系列局とはどういう力関係にあるか。現地がけっこう強い系列とすべてキー局がコントロールする系列とがあるようだが。

**星野** まあそうですね、そういう比較で言ったらその中間ぐらいでしょうね。系列局の社長はうちから行ってますから。健闘していましたが、常に風評被害的なことを、地元は気にしながらの報道であったのは間違いないですね。それを説得して。

—— 気仙沼に臨時支局を置いた際に、系列局の働きかけがあったのか。

**星野** いや、それは全然ないです。東北放送も岩手放送も、TBSが気仙沼に臨時支局を作ると説明をしたあとは話ののってききましたけど、[自局で臨時支局を持つという]発想はまったくなかったです。つまり東京のキー局が直接支局を作って、そこに支局長がいてそこからエリアを超えて取材するという発想は全然なくて、はじめのうちは地元の編集権はどうなるのとか、そういうことも気にしていた。説明した後は、支局長はTBSで、デスクも両方の局、例えば東北放送とか岩手放送から人を出すということで安心してましたけど、はじめは「TBS、東京支配」ということに編集権の取材指揮を東京の支局長が直接する、ということについては、すぐに腑に落ちる感じではなかったですね。これはもう順番に電話で一生懸命説得しました。

—— 毎日放送との関係は3・11後に変わったか。

**星野** 毎日は無いですね。毎日放送も、発信力を高めることについて別に異議を言うことはもう全くないわけで。そこは大丈夫でしたね。必ずかなりの人を割いてくれました。

—— 発災当時、原発事故の直後にTBSは現地へ人をすぐ出したと思うが、避難など記者の安全確保の点で、その後のマニュアル改訂で変えた点はあるか。空間線量に基づく指示基準などは？

**福島** それはもう。3・11後は避難指示対象区域が拡大したり変更されたりしたので、我々としては参考にせざるをえない。

—— 報道批判に関連するが、「一部のマスメディアは住民たちは留まっているのに避難していった」と語られたケースもあったが、これをどう考えるか。

**星野** うちのほうではそういうようなことは全く無かったという認識なので……。

**福島** 住民の目の前で引き揚げていくというような場面は無かったと思いますけどね。

—— 逆に、記者たち、もしくは報道陣の安全確保の点では批判はなかったか。

**星野** それはあとから考えると危ないこともあったなというふうに思いますけど。記者たちはみんな、

突っ込むのがすごく大好きで、止めても行くっていう感じで、もう「行かせてくれ、行かせてくれ」ばかりで、止めるのに大変でしたね。本当に。

—— 会社の経営としては、それに対してノーと言わざるをえない場面も？

**星野** というか、「上で指揮する立場の者が自分で行きたいからと行っちゃってどうするんだ」と。「誰が全体の安全管理をするんだ」ということはよく言いましたけど、とにかくみんなすごく現地に行きたがってました。福島に取材本部を作ってから毎日線量計持たせて積算線量とか管理するようになりましたけども。とにかくみんな行きたがってました。やっぱり習性っていうか、出ちゃうんですね、もう行きたくなくなっちゃうんですね、あれね。

—— 「報道のTBS」という意識もあったか。

**星野** いやいや、そんなもんじゃなくて、やっぱりあの事態に対したらそういう対応にならざるをえないでしょう。どこのメディアもまったく同じだと思いますけど。

—— 発災後の、東京電力を中心とするスポンサーとの関係に軋轢は？

**星野** 全くないですね。全くないですね。

—— その後CMをやっていないから？

**星野** やってないですから、それはもうないですね。

—— 民放局としてはスポンサーへの配慮の負担は感じるか。

**星野** それも全くないです。配慮する場がないでしょ、だって。どう考えても。今回のことに関して言えば。

—— 首都直下地震を想定したとき、東京の放送機能を失ったりした場合の代替機能や、BCP（事業継続計画）はその後作成したか。

**星野** それは無かったんですが、一生懸命いま全国規模で演習というか訓練をやったりしています。

—— もう一つは民放協力について。ヘリを1台共用につくばに置いて民放で映像を共有するといった以外に、大災害時への対応として民放間協力は更に上げられるか。

**星野** はい、やっぱり災害の規模ですね。つまり、今回の激甚災害時の協力ということであると、まあ、NHKさんは入ってないです。全国のヘリコプター台数はですね、うちが大体11~12台だと思うので、NHKさんはもっともっとある。たぶん15ぐらい。さらにはNHKさんは、そのヘリコプターに全部カメラマンがずっと張り付いてる。交通事情が東京よりいいってこともあるんですけど、こちらは災害が起きてからカメラマンが行くんですね。そこが大きな違いなんです。激甚災害時はおそらくヘリ映像のプール化というのはあると思います。やはり死者2万人という大きさを、この被害を少なくするという、激甚災害については報道機関には防災機関としての使命もありますから、NHKも含めて、いろんな組み合わせがあっていると思います。報道の競争はそこから先の話だと思うんですね。特ダネ映像の扱いとかいうのも、こないだの震災時のヘリの共有化の際の議論でも出てたんですけども、それはそれでみんなで認め合ったり、先にちょっと優先的にオンエアをする時間を作って、言ってみれば署名をさせてしまえば、あとは本当にもうぐずぐず言わないでフルオープンで、特に首都圏の場合はやろうよと。この2万という数字がうんと上がっちゃうわけですから、これを減

らすことについては協力してやろうよというのは、精神的な紳士協定ですけども、これについてはもうできあがっています。

—— TBSは損をする側。

**星野** そう。これ、僕中心でやっていたんでどうしようかな、というふうに思ったんですけども。つまりテレ東は1台しかないんですね。みんなほかは2台あるんですけど。でもまあ、その精神からいったらこれはやっぱり声をかけざるを得ないねと言って、始めは4社で協議していて、決まってから「のりですか、のりませんか」と言ったんですが、声かけたら非常に喜んでました。その1台しかないヘリが、自分のシフトのときはつくばに行くわけですから、例えば東京の交通事故のときは不便ですよ。不便ですけども1台しかないわけだから、そのときは臨時でもう1台借りるか、デイリーをそっち拠点でやるかなんですけど、ヘリだからご存知のようにできますけど、この仲間に入れたことは、向こうはすごく喜んでましたね。

—— そうした民放間協力は情報カメラの共同設置あるいはもっと極端に言うと、TBSラジオ等が連携してライフラインの機能別に分担した情報提供などを行っている試みにまで拡大するのは難しいのか。

**星野** 難しいですね。だから、必要最低限なところですね。やっぱり、災害が起こってみるとヘリコプターというのは、ものすごい大事で。つまり、ヘリコプターなしにはなにもできない。逆にヘリコプターが飛んでいるところの映像が来たら、始めの数時間は基本的に災害報道できる。そこは目に見えるところなので共有化、フルオープンでもいいかなという発想でしたね。

—— 競争を欠いても協力しようということだと思うが、3・11震災時から1週間ほどは、NHKも含めて放送はどこの社も同じような内容をやっていたという批判があった。この点はどうか。

**星野** 内容を分けたほうがいいっていうのは、ありましたね。

—— 激甚災害時の協定のようなものを結んで、TBSはこの分野、テレ朝はこの分野と、取材エリアを分けて民放で協力し合うということは可能か。

**星野** 無理です。ヘリ映像、つまりあの津波の映像は印象に残りますが、あれは本当に最低限で情報を伝えるための一番の本当の入り口だと思いますね。あのくらいの情報は各社報道機関でみんな揃ってて、何か起きたときは逃げたりできるように実態を見てもらわないともう意味がないんじゃないかっていう、そういうレベルの話ですね、あれは。

—— それを常設の情報カメラ映像の共用、というところにまで広げることは可能か。例えば福島中央テレビが撮った一号機の水素爆発の映像をあまり間を置かないでプール化していれば、相当違ったインパクトがあったと思うが。

**星野** 違ったと思いますね。ただ、あれもね、地方局とキー局の関係で、使用する最終的な権利は福島中央テレビにある。1回NHKさんの特番に貸し出しましたね。申し訳ないけど、NHKさんの特番もいろいろ頑張ってたけど、あの画って10秒ぐらいでしょ。で、あの10秒ほどの画を上回ってなかったですね。NHKさんの全部の内容が。その10秒がすべてでした。

—— いわゆるアニバーサリー報道についてはどうか。震災から1年、2年、3年に組まれる番組に

ついては？

**星野** すごい有意義です。

—— どんな点で？

**星野** やはり東北というか、津波被害地域については、いわゆる記念日報道でも復興を加速するというふうにあります。原発事故地域はまだかなわないんですけども、ここがちょっと原発と違って、やはり、あれを見ると東北へ行くという。見たい——見たいというのはその復興の状態も見たいし、別の観光地も行きたいという、いわゆる需要喚起にもものすごくなりますし、それからやはり復興の現状は、地に足をつけて報道しなければいけない。東京の人、特に西側の記者はパッと来て——前に比べれば少し報道していましたが、一定の時間がたったらやはり帰ってしまう。地元局がコツコツやるしかない、という事実もやはりあるかと思っています。そういう不足分を周年企画で補てんするという意味で、非常に意味がある。5年とか10年というスパンではなくて、今回の震災についてはそのところはずっと、やらなきゃいけないというふうにあります。

—— 膨大な未発表の映像や資料のアーカイブス整備についてはTBSは何か考えているか。

**星野** 全然手がついていない。もう膨大にある。

**福島** もちろん登録はしてあるんですけどね、素材として。埋もれてしまうようなことはないようにはしてるんですけども、本当にごくごく単純な情報しかたぶん登録してない……。

—— 録画などは？

**福島** ライブラリに置いてあります。テープ自体はすぐにデジタル、例えばハードディスクに落とし込むってことではなくて、最短でも1年は報道局の脇の倉庫にすぐ取り出せるようにしておきますので。これをそうやって落とし込む作業はまだこれからですね(注3)。

—— 首都直下地震が起きた場合のBCPは、いつ頃どういう形で作られたか。

**福島** 3・11前にも、TBSの本社機能がダウンすることは当然想定していたわけで、その場合にはここにある放送送出機能を大阪の毎日放送(MBS)に完全に移す、という形のシミュレーション、訓練なども過去にやっていました。いまその機能をさらに際立たせて、放送はもちろんなんですけれども、例えばTBSの社員とかの安否確認ですね。これも「電話がつながらなくて、東京ではどうしようもない」という場合には大阪に例えば情報を提供するとか、大阪のほうで情報を集約してもらおうとか、そういうところまで訓練をやっています。ですから広く危機管理めいたことも含めて、東京がダメな場合大阪にというのがまず一つ。

それから、防災の専門家から、ここ数年言われているのは、東京と大阪じゃリスク分散にならないだろうということです。確かにそうなんです。国外っていうわけにはいかないんですけども、大阪にあるMBS毎日放送、名古屋にあるCBC中部日本放送、それから福岡にあるRKB毎日放送にも、全国の放送が可能な機能を最低限は確保できるような、技術的な設備の拡充、これを始めています。いずれも南海トラフの影響を受けるところなので、個人的には北のほうにもとか思ったりするんですけども、少なくとも東京がダメでもそういう形で放送が途切れないようにという発想は持ってやっています。それと、例えばこの建物が大丈夫だとしても、スカイツリーは本当に大丈夫かとかい

う問題もあります。リスク分散の観点からいろいろやっぱり思うところは3・11以降ありますね。

—— 首都直下地震発生の場合には、確かに大阪から代替して送出はできると思うが、スカイツリーは首都圏を広域にカバーしている。例えば被災地外の群馬や栃木までカバーしているが、それらの地域への放送は、地上波ではなくBS、CSに任せるという発想になるか。

**福島** そこまで割り切っていないですけども、結果的にそうなる感じはあります。

—— スカイツリーが使えなくなると、広域で送受信ができなくなると思うが。

**福島** その可能性を何かで解決しようというところまでは正直行ってないです。ただ逆に言うと、さっきのユーストリームじゃないですけども、僕は個人的に放送局に働く災害担当として感じたのは、やっぱりあの震災まではテレビ局の人間の仕事って、免許を貸してもらっている電波に情報でもコンテンツでも乗せるのが仕事だと思っていたわけですよ。今やそうじゃない。もうソーシャルメディアでもSNSでも、ありとあらゆる情報の出口があるんだったらそこに落とし込んでいけばいいという発想なので、そういう意味で言うとスカイツリーを代替する送信局を置くこともそれはもちろんありでしょうけど、コンテンツを作る能力があって、通常のいま使っている電波に乗せることが無理だったらほかのものに乗っけてしまえばいい。もうそういう発想です。何が何でもという、なりふり構わずということだと思っただけです。

—— 福島原発を中心として、広域避難をされてます。そうすると実は、県域テレビっていう概念が意味がない、見たいわけですよ。SNSと県域放送というのはどう整理されているのでしょうか。

**福島** いやあ、その整理はできてないと思いますね。それは現地局も含めて(注4)。

—— アナウンサーの呼びかけの文言を変えたのはいつ頃か。具体的なマニュアルはあるのか。

**福島** マニュアルというか、元となる原稿は用意してあります。

—— NHKでは「東日本大震災を思い出してください」という表現が入ったりしているが、TBSではどうなのか。

**福島** まず津波に関しては、今年の、2013年の3月に改訂したのが最新版です。2011年以降改訂しなかったかというところではなくて、翌年の2012年にも改訂していますけれども、一番大きい改訂はやはり去年の3月です。これはご存知かもしれませんが、去年の3月に気象庁の津波警報、津波注意報の発表の仕方が大きく変わりました。つまり、東日本大震災をもたらしたあの巨大地震のようなM8をはるかに超えるケースと、そうではないけれども津波を起こす地震のタイプ。これについては精度の高い津波の推定がどうしても難しいので二段構えにしようという発表形式に変わりました。これを踏まえて、というのがまず一つです。

2012年の前で言うと、まずNHKさんと似た点で言うと、「東日本大震災を思い出してください」というフレーズがときに入ります。NHKさんは確か大津波警報の場合に、時々はさみこむ、というふうに聞いていますけれども、うちは津波警報でも言う場合がある、ということになりました。これを決断したのは、星野なんです。いろいろこれについては議論がありました。津波が来るという場合に読むべき原稿は、かなり客観的な表現の中で、唯一例外的にエモーショナルな呼びかけなんです。これは、何か実態があって言うのではなくて、3・11のときに逃げるべき状況にあったのに、逃げよ

うとしなかった方が大勢おられる。いろいろ理由もあるんでしょうけど、逃げるべき人に逃げていただけのらだったら、もう何でもありだという思いがあります。それが一つです。

それともう一つは、簡単に朗読しますが、こういう一文があります。「近くに高台や津波避難ビルが無い場合は、鉄筋コンクリートでできた背が高く大きくて頑丈そうな建物のできるだけ上のほうの階に避難してください」という一文です。実はこれに似た一文は 2011 年の前にもあって、何がどう変わったかという、「近くに高台や津波避難ビルが無い場合は、鉄筋コンクリートでできた建物のできれば3階以上に避難してください」というふうに言っていたんです。3階以上というのがポイントです。ところが3・11、蓋を開けてみたら、3階どころじゃなかった。この「3階」には意味がもちろんあって、この呼びかけを作るにあたっていろいろ津波の専門家、防災の専門家、災害心理をやってらっしゃるような、社会科学系の方も含めて相談しながら決めて、実質3階以上、鉄筋コンクリートでできた建物であればまず問題ないでしょう、というのが共通見解でしたので、それを踏まえて放送していたんです。背筋に寒いものが走ったのは、私自身その原稿の制作責任者であったので、もしTBS系列の流したこの「3階以上」という呼びかけを聞いてそれを忠実に守って被災した方がもしいるとしたら——まあ、そういう報告は特に入ってきていないんですけども、これはもう本当に目も当てられない。非常に罪深いので、ここはもうすぐに変えました。

ただし、3・11の前まではむしろどこに逃げるべきかが分からない人たちに対して具体的にイメージさせるってことが大事だと思ったので、そこに関してはかなり踏み込んだ表現をしているつもりだったんですけども、それが決して最適ではなかったということに気付かされてすぐに原稿を変えたってところがありました。

—— その頑丈な建物への避難という呼びかけをする際の判断基準は少し下げたのか。

**福島** いや、下げている。基本的には津波警報以上です。例えば津波注意報でこの文言を言うかといったら、それはあり得ないです。

—— 津波警報で「東日本大震災を思い出してください」という文言を言う「場合がある」という、その判断については。

**福島** 「東日本大震災を思い出して下さい」という文言は、これはしゃべり手に任せています。もちろん不用意に言うべきコメントではないんですけども。

—— 「出来るだけ上の方の階に避難してください」というのは、警報以上のときには言うのか。

**福島** 言います。大津波警報でも言います。

—— 小さい変更点だが、意味は大きい。

**福島** 細かい点ではありますけど。

—— ウェブ配信等での共同・協力については今後どういう体制整備を考えているか。

**福島** 厳密にこういう協定を結んでいるというところまではたぶんいってないと思うんですけども。私もすべて把握しているわけじゃないですが、これだけの広域災害かつ激甚災害というハードルをクリアするのは高いと思います。例えば台風が来て、ある程度浸水する家屋が多く出たから、ユーストリームにそのまま流すかという、そんな簡単なものでもないような気がするんですね。広域に停電

が起きているとか、放送を見たくても見る人がいない、放送で防災上の呼びかけをした  
いけれども通常のテレビ電波では届けられないというのが想像されるときにこの手を使うということ  
だと思いますね。何でもかんでも災害が起きれば全部ネットで配信するかっていうと、そうではない  
とは思いますが。

—— 激甚災害の場合にはお互い協力し合うことになっているのか。

**福島** はい、実際実績ができていますから、ユーストリームと。

—— 連絡取りあって態勢はできている。

**福島** はい。3・11の、先ほど申し上げた例で言うとユーストリームへの配信はむしろTBSから持  
ちかけました。ユーストリームからすると、どうぞ使って下さい、載せましょうということだったと  
思いますけど、その構図はたぶん変わらないんじゃないかなという気がしますね。あとはテキストで  
言うと、例えばフェイスブックであったりツイッターであっても、文字情報として落とし込んで出し  
ていくというのも、たぶんこれからはもっと頻繁にやっていく形になるだろうと思いますね。

—— 社内では報告書とか総括のとりまとめを作成したか。

**福島** 報告書という趣旨とはちょっと外れるかもしれませんが、基本的にはマニュアルであったり  
手引きであったりそういった形、それから——。

—— 記者の体験記録。

**福島** ええ、それもあります。ありますけれど、それだけで一つの冊子になっているということでは  
なかったように思いますね。

—— さきほど伺った災害報道プロジェクトは3・11の取組みを共有し、次の災害に備えた体制作り  
を図るという目的か。

**福島** まあ広域災害、これをにらんでいますね。ずっとその特番をやっていかなければいけないよう  
な状態というのがまず念頭にはあります。その場合、報道局だけではなくて、先ほどちょっと言葉足  
らずだったと思いますが、いわゆる情報番組を扱っている情報制作局の人間にも入ってもらっていま  
す。実際3・11のあとの特番は、もう報道局だけでは当然まかなえなくて、情報制作局の協力ももち  
ろん得ましたし、生中継に慣れているスポーツ局であったりとか、とにかく人海戦術でまわしました。

—— 情報制作局には記者はいないのか。

**福島** いないですね。番組の中のディレクターなりスタッフが取材をするっていうことですね。

—— 「災害報道プロジェクト」は全局体制とのことだが系列との連携は？

**福島** 「災害報道プロジェクト」に関して言うと、系列と云々というのはいまのところないですね。  
直には、ただ、うちの局って官僚的な組織のわりには、横の交流は報道に関して言うとそこそこ密に  
あって、デスク同士、部長同士、あるいは局長同士での情報のやりとりは、かなりやれていると思っ  
ています。いつもフェイス・トゥ・フェイスっていうわけにはいかないのですが、メールでの連絡、電話  
での連絡がメインになりますけれども。

—— このプロジェクトの会合などの頻度は？

**福島** 人数が多いのでなかなかそこも難しい。



—— 人数どれぐらいか。

**福島** 数十人以上ですね。

参考になるかどうか分かりませんが、災害対応訓練で言うと、NHKさんみたいに夜間に毎日、というのはさすがに無理で、うちは月1でやっています。いま3・11の月命日の11日にやるようにしています。11日に朝、昼、夜と。朝は朝の情報番組が終わったあと、昼は昼の情報番組が終わったあと、夜は夕方のニュース番組が終わったあと、それぞれの番組がかなり放送している時間帯が長いものですから、朝ですとたとえば5時半から8時までやっていますし、昼だと11時から2時までやっていますし、夕方は4時から7時までやっています。その生放送中に有事を迎える可能性が非常にありますので、この3つそれぞれで地震訓練をやるということで、これは各番組のスタッフだけではなくて、報道局の記者であったりアナウンサーもそうですし、報道局の地震災害担当者がコントローラーとして入って訓練をやるという形をとっています。

今までは、あまり合理性の無い予定調和的な訓練に終始していたんですが、かなり訓練のシナリオが増えてきて、アナウンサーやスタッフには一切事前にはシナリオを知らせない、という形でやっています。簡単に言うと、津波がある場合、津波が無い場合。例えば内陸直下、首都直下ケースもありますし、津波を伴う南海トラフみたいなケースもあるし、まず緊急地震速報からくる場合もあるし、いきなりドスンと来る場合もあるし、もういくつかシナリオをいろいろ組み合わせてちゃんとそれに即した対応ができるかというのを、きちっと検証するというようなスタイルでやっています。それくらい力を入れると、やはり毎日というのはさすがに無理です。まあ、本当はもうちょっと頻度をあげたいんですけど、月1がいいとこかなと思っています。

—— 全てシナリオは福島さんほか災害担当が用意する？

**福島** そうですね。

—— 訓練には毎日放送も加わるのか。ほかの系列局は？

**福島** 系列は含まないです。TBS局内だけです(注5)。系列を含めると回線とったりとか、費用的に大変です。それに、夜泊まりなんかいないような局とかいっぱいあるので、夜間の訓練はやはりできないですね。

—— ローカルの報道局はアナウンサーも含め20人規模のところもある。

**福島** 夕方のニュースが終わっちゃうと、例えばテロップ打つ人も帰ってしまうとか、そんな状態なので。最近で言うと、先月の末に、TBSだけなんですけれども、大がかりな訓練をやりました。2時間規模です。これはずっとやりたかったという訓練をやりました。首都直下地震を想定して、まず第一条件として固定電話、携帯電話、いっさい使えないという想定で実施しました。つまり情報収集も本社とのやり取り、本社からの指示、安否確認その他、いっさい通常の電話が使えない。唯一使えるのは災害時優先電話の発信と、それから衛星を介した電話、あるいはWi-fiが繋がる環境でのソーシャルメディア、SNSだけでやり取りをし、映像もそれで電送し、あるいは中継もやってしまう。つまりもうこれですべてやってしまうという訓練を初めてやって、まあやはり、いろいろ見えてきました。電話が無いと不便だというのはあらためて分かりました。しかし、あの3・11のこと考えると

ゼロパーセントではないなど皆が思ってくれたのが、たぶん一番の成果かなと思っています。

—— 毎月 11 日に朝昼夜やっている訓練は 3・11 後から始めた？

**福島** そうです。それまでもやってましたけども、不定期に、ちょっと気がついたときに訓練をしていました。例えば春の交通安全運動じゃないですけど、一週間ぶち抜きでやるとかそういう感じでやってたのを、熱が冷めてしまうのもどうかと思うので、とにかく定期的にやる癖だけつけちゃおうと。なんとなく皆が乗りやすいのはやはり 11 日という日付だったというのはありますね(注6)。

—— 3・11 発災当時、TBS 本体からは茨城も含む被災地にはどのぐらいの部隊を送り出したか。

**福島** TBS 単体だとどのぐらいになるかな……。

ネットワークも含めて、直後に被災地に入った人数が 250 人なんです。系列含めて。このうちの大半は TBS だと思うんですけども。でも同じ時系列でいうと NHK さんは 1500 なんです。最初の 24 時間ぐらいで、1500 ぐらい応援で行かれていて、で地元にはもっといらっしやるわけです。すごいなと思って見てました。

—— ガソリンについてはすでに伺ったが、そのほかのロジスティックスやそのスタッフのケアの話もうかがいたかった。ロジや保険にも見直さなきゃいけない点はあったか。

**福島** 動燃の東海事業所火災爆発事故の際に一つマニュアルを作り、そのあとに 1999 年の JCO 事故で改訂した。

—— 「JNN 取材取り決め」というのを作られたと聞いた。

**福島** 警戒区域や計画的避難区域等の設定や変更に応じて改定しており、通称として「原発取材安全取り決め」と呼んでいます。

—— それは安全確保のマニュアルで、いわゆる取材マニュアルではない？

**福島** 取材マニュアル風なところも色合いもなきにしもあらずですけど、でも比重で言うとおっしゃる通りです。

—— 取材中止の目安は年間積算 1 ミリシーベルト、毎時 10 マイクロシーベルトか。

**福島** それは 97 年、99 年当時の取り決めです。

—— 2011 はその条件はやっぱり多少変わったわけですか。

**福島** 10 マイクロ瞬時だったらもうアラームがピーピー鳴りっぱなしですので。

—— いまは 10 マイクロに限りなく戻ってますけど、震災直後には一時 100 マイクロまでなったときもあります。

—— 瞬間 100 マイクロまで許容か？

**福島** はい。でもう直ちに退避っていうのがありました。瞬間ですね。

—— 今日はありがとうございました。

〈了〉

## 注

(1) 原発に関しては「チーム福島」を JNN 系列で原発を抱えている局のデスクで立ち上げ、情報共有、勉強会を

行っている (2017年3月補足)。

(2) 災害報道プロジェクトは組織としては残っているが、現在は次の2種類を新設。

- 1) チームJNN： 熊本地震の後から各局災害デスククラス1名以上で、年2回、情報共有をしている。また、TBS局内の訓練に加えて、TBSと系列1局で毎月の地震訓練を、またTBSと系列複数局で南海トラフ巨大地震などを想定した大がかりな訓練を実施している。
- 2) チームJ： ヘリコプターを持っているコアメンバー。 HBC、TBC、TBS、BSN (新潟)、SBS、CBC、RCC (広島)、MBS、RKBで被災地を支援する枠組みを作った (2017年12月補足)。

(3) ファイルベース化を2016年1月から開始した (2017年12月補足)。

(4) 福島のTUFでは、事故後、一時期、埼玉に避難している双葉町民向けに、ローカルニュースをIP伝送で避難所 (埼玉アリーナ) で流していた (2017年3月補足)。

(5) 現在では系列局と一緒に訓練をするようになっている (2017年12月補足)。

(6) 現在は月2回となっており、11日に限定していない (2017年12月補足)。

